

樺太アイヌのトゥイタハ——B. ピウスツキによる英訳テキスト

The *tuytah* (fairytale) from Sakhalin Ainu collected by B. Pilsudski

阪口 諒*

SAKAGUCHI Ryo

Abstract: This paper is a translation into Japanese of four Sakhalin Ainu *tuytah* collected by B. Pilsudski from the east coast of Sakhalin. The reason for making such an attempt is that the oral literature of the Sakhalin Ainu that is known in Japan has a large regional bias. I have translated and annotated four of the *tuytah* texts for which only English translations have been published. Since the original Ainu texts of these *tuytah* have not been found, I have done as much research as possible on similar tales in translating and commenting on them, and have added detailed notes in an effort to bring them closer to the original narratives.

0. はじめに

樺太アイヌの物語は日本語で読めるものが大半だが、日本語に翻訳されていないものも存在する。本稿ではそうしたもののうち、ピウスツキが採集した4篇のトゥイタハ¹⁾の日本語訳と注釈を行う。樺太東海岸のトゥイタハは、知里真志保、ピウスツキなどによって記録されたものがすでに公刊されているものの、その採録例は西海岸に比べると少ない。この4篇は、ブロニスワフ・ピウスツキが採録したもので、樺太東海岸のものと同様に推測される²⁾。この英訳トゥイタハ4篇は1912年に公刊されているものであるが、この4篇を日本語で紹介したものは管見の限り見当たらない。そのため、日本語で読める資料を増やす意味でも重要であると考え、ここに翻訳する。訳注は、この資料を広く紹介するという点でも重要だと考える。なお、以下では、Pilsudski (1912b) *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*に言及する際、『研究資料』と表示する。

1. Pilsudski (1912a) Ainu Folk-Lore収録のテキスト

今回翻訳するのはPilsudski (1912a) に収録のトゥイタハである。Pilsudski (1912a) には12篇の樺太アイヌの物語の英訳が掲載されているが、第1話～第3話はオйнаOyna [oyna] であり、第4話～第6話、第11話はウチャシコマUtšaškoma [ucaskoma]、第7話～第10話はトゥイタハTuita [tuytah] である。また、第12話はハウキHauki [hawki] である (Pilsudski 1912a : 72、カタカナと [] 内のローマ字は現在一般に用いられる表記)。Pilsudski (1912a) に収録されているトゥイタハとハウキはピウスツキの他の著作で確認

* 千葉大学大学院人文公共学府博士後期課程／日本学術振興会特別研究員

¹⁾ ピウスツキはtuitaと表記しているが、本稿では特に必要のない限りジャンル名としてはトゥイタハ *tuytah* を用いる。ローマ字表記、カナ表記ともに北原 (2013) に準拠する。語末のhに関して、樺太東海岸富内 (トンナイチャ)・落帆 (オチョボッカ) の言葉をもとに「樺太アイヌの音韻組織」をまとめた金田一京助は「h音が語の終りには聞えないがちだけれど、語或は音 (但し子音) が続く時には明瞭に聞こえる」(金田一1911 : 472) と記述している。

²⁾ ピウスツキ (2000) によれば、ピウスツキは西海岸の真岡にも行っているが、物語の採録はうまくいかなかったようである。

できないが、ウチャシコマ4篇は『研究資料』第3話、第13話、第16話、第17話と同じ話である（ただし、訳文および注は同じではない）。なお、Pilsudski (1912a) 中のオイナに関しては、すでに阪口 (2018) において訳注を行っている。

1. トウイタハというジャンルに関するピウスツキの記述

『研究資料』に基づくと、樺太アイヌの口承文芸（歌謡やなぞなどを除く）はハウキ（英雄叙事詩）、オイナ（神謡）、ウチャシコマ（伝説）、トウイタハ（昔話）というジャンルに分けられる（Pilsudski 1912aもこの4つのジャンルからなる）。ハウキとオイナは各行が5音節に揃えられる。ハウキは英雄の冒険と部族同士の戦いを語った物語であり、男性が語るものである。オイナはその多くが半神半人の、超自然的な敵や野獣との抗争を語ったもので、リフレイン³⁾をつけて謡われる。語り手は男性・女性の両方がなる⁴⁾。ウチャシコマは地方の村長と結びつけられることの多い口伝えの歴史で、たいてい高齢の男性が語り手となる。トウイタハはすべて夢に端を発するもので、ふつう婦人と子供が語るものである。

本稿で訳出するトウイタハ4篇はピウスツキによって採集・英訳されたものである。ピウスツキがこのジャンルをどのように認識していたのか知るためピウスツキによるトウイタハの解説の全文を以下に引用する。トウイタハを内容から5つに分類している。

- (a) 人間のようにふるまって生活しているが、獣としての特徴—たとえば狐の狡猾さとか狼の貧欲さとか—を見せる動物の話のすべて。
- (b) 四つ足の獣、鳥、魚と、人間との恋愛関係の物語。
- (c) 魔物や鬼が人を悩ませる話。
- (d) 奇想天外な冒険。たとえば、先祖伝来の靴に足の合う妻を探し求める男の話とか、一本の矢にそれを作って射た男の面影を見て、結婚を願う乙女の話とか。
- (e) 隣同士の二人の男にまつわる、枚挙にいとまのない奇談。一人は知恵を使って成功し、もう一人は間抜けでそれを猿まねしようとして、とんでもない目に遭うか死ぬはめになり、その妻はもう一人の男の奴隷になってしまう。この類いのアイヌ人の話すべてにおいて、若い男の方が年上の男より賢くて勇気があるということに注目したい。 (『研究資料』XVII；ピウスツキ1983：110)

Pilsudski (1912a) の第7話、第8話がa、第9話がbに当てはまると思われる（第10話はcに該当するのだろうか）。ピウスツキの遺稿であるPilsudskij (2002) には、上の分類bに当てはまると思われるTuita 5や、cにはあてはまるTuita 9がある。eは北海道西南部のパナンペ・ペナンペ・ウウェペケレ (Panampe Penampe uwepeker) (以下、パナンペ譚) に相当するもので、樺太でも同様の話がある（知里1955参照）。しかし、Ohnuki-Tierney (1969) Tale 9のように「三人きょうだい譚」となっているものもある（この物語は話者によれば

³⁾ オイナのリフレインはサーケへsaakeheやモトホmotohoと呼ばれる（村崎1989：6）。また、萩中（1987：395）には西海岸北部出身の話者2名の言葉としてホシピカhosipikaが紹介されている。

⁴⁾ Ohnuki-Tierney (1969：3) にあるように、女性は男性のように節をつけて語ってはいけないという証言もある。それに対し、村崎（1989：6）には、オイナは女性が語るものだと記されている。

ウチャシクマだという)。樺太アイヌの「三人きょうだい譚」に関しては丹菊(2012)参照のこと。

2. その他のピウスツキ採録のトゥイタハ

ピウスツキが採録したトゥイタハ138篇のタイトルはPilsudski(1998:262)に見ることができるが、大半のテキストの行方は現在まで知られていない。ピウスツキが採録したオйнаでアイヌ語原文・日本語訳が公開されているものとしてはPilsudskij(2002)のTuita 1~11の11篇がある(ピウスツキ自身によるロシア語訳付き)。いずれも1903年、セラロコSeraroko(白浦)~トゥナイチTunayci(富内)でピウスツキが採集したものだという。Tuitaテキスト全体の日本語訳としては村崎(2001)がある。英訳はPilsudski(1998:277-331)参照。そのほか、高橋(2014:22)は、Pilsudski(1990)からTuita 4を訳出している。また、Tuita 3の内容面、言語面を考察したものに阪口(2020)がある。

3. トゥイタハの内容と形式

ピウスツキが調査を行ったのは1900年代の南サハリン東海岸であるが、知里真志保が調査したのは1940年代の樺太(南サハリン)東海岸の白浜や西海岸南部の多蘭泊である。知里真志保に協力した和田文治郎、佐々木弘太郎、山本利雄(祐弘)らによって、西海岸北部を含めた広い地域で調査が行われている(特に和田文治郎は戦後も精力的に民俗調査を行っている)。東海岸のものとして発表されたトゥイタハは、本稿で訳出するPilsudski(1912a)の4篇のほか、Pilsudskij(2002)に11篇ある。そのほかには、知里(1948;1953a;1955)、金田一・知里編(1948)に掲載されたものがある。知里真志保がNHKの依頼で1951年に採録したレコードにはリフレインも節もある東海岸の「トゥイタッ」が二つ収録されている(NHK Vinylcord 1951)。

戦後は、北海道以南に移住した西海岸北部の話者から更科源蔵、田村すず子、大貫恵美子(Ohnuki-Tierney, Emiko)、村崎恭子がトゥイタハを含めた民話の採録を行っているほか(更科1963; Ohnuki-Tierney 1969; 村崎1976、北原ほか編2003など)、村崎恭子は1980年代に西海岸北部出身の語り手から採録した多数のトゥイタハのテキストを原文対訳で発表している(村崎編訳2001)。

いずれの研究でも、ジャンル分類が試みられている。これまでの研究で、トゥイタハはウチャシクマ(ウチャシクマ)とともに、散文説話に分類されている。しかし、この二つのジャンルの形式的な定義に関して、それぞれの研究者の記述は一致しない。

形式に関する主な研究としては、ピウスツキのほか、知里真志保、大貫恵美子、村崎恭子、中川裕、丹菊逸治、佐藤知己などの研究がある。ほとんどの研究はトゥイタハが散文であると指摘する(知里1955; Ohnuki-Tierney 1969; 佐藤2000)。ただし、村崎(1988)や丹菊(2001a, b)は、散文説話だが、しばしば挿入歌を有すると指摘している。中川(1996:157)は、樺太のtuytahが示す形式を、節のついた部分(注一村崎のいう挿入歌など)が挿入される場合がかなりあるということを重要視して、①韻文形式と散文形式の混在、②サケへと見なせる部分を持つ場合もある、③三人称叙述である、という3点にまとめている。筆者も、アイヌ口承文芸のジャンル分布の歴史的变化を考えた場合、この指摘が最も有効ではないかと考える。なお、一人称形式のトゥイタハがあることは丹菊(2001b:41)が

指摘している（東海岸で記録されたトゥイタハの人称に関しては阪口2020でより具体的に提示した）。これら、散文形式と韻文形式が混在するという指摘に対し、それを本来の姿だと想定しない考えもある。佐藤（2000：176）は、「西南部の千歳方言においては、散文の説話は、やはりウウエペケレと呼ぶが、これとは別にトゥ＝イタッという語もあり、口承文芸の特定の分類ではなく、危険な体験をした話、苦労話を指すという」と記述したうえで、tuytak（樺太のtuytahに対応する形式）が「最初は千歳におけるごとく苦労話という一般的な意味であったものが、一部の地域で特定の分類を指すよう特殊化した可能性」を指摘している。苦労話という意味のtuytakが、どれほど確認できるのかは不明である⁵⁾。幌別ではtuytakは「規則」（服部編1964：53）を意味するようである。沙流では語り手自身の体験談はupaskumaやisoytakとも言われることがあるらしい⁶⁾。静内の話者は（先祖の体験談と）自身の苦労話をikopepkaと呼んでいる（奥田1998；アイヌ民族博物館編2001）。tuytakが苦労話を指し示すのは非常に限られた地域であると思われ、むしろ、西南部で一般的ではなかったtuytakという語が、苦労話を指し示す語として転用されたとも考えることもできるだろう。同じく西南部の幌別では「規則」（服部編1964：53）のように異なる意味で記録されているのも、西南部では元々馴染みのない語だからと考えられる。

『研究資料』において、散文とされるものに、ウチャシコマとトゥイタハがあるが、そのうちウチャシコマは、アイヌが数世代前に生きていたと考えている実在の偉大な首長を扱ったものが多いとされる（xv）。トゥイタハは、前節で引用したように、様々なおとぎ話からなるジャンルで、その中には神として扱われない動物が登場したり、人間の形に変えられたりするものもある（xvi）。この中には、前述のように、ペンケアंकッPenkeankuh「川上の者」やパンケアंकッPankeankuh「川下の者」が登場する「隣の爺」系の物語（パナンベ譚）も含まれる⁷⁾。北海道東部では、この種の物語の一部には、オイナとされるもの（浦田編1998：159-160；『四宅ヤエの伝承刊行会』編2012：214-231）や、トゥイタッとされるものもある（杉村ほか1969：273-285；知里1955：258, 259脚註〔この註は1973年に刊行されたものでは註8〕）。樺太では文化英雄ヤイレスーポYayresuupoと、ヤイレスーポに関わるカムイの話はオイナと分類されるが、ヤイレスーポに関わらないカムイに関する話はトゥイタハに分類されているとの指摘がある（中川1996：160）⁸⁾。動物同士の話や、器物や自然の素材が主人公となる話には挿入歌が見られないと丹菊（2002：42）が指摘しているが、こうした形式の幅も、ヤイレスーポに関わらないカムイの話である、人間の首長と関わる事実譚ではない、などの理由でオイナやウチャシコマに組み入れられない物語が、トゥイタハとして扱われるようになったことに由来すると考えられるのではないだろうか。

⁵⁾ tuytakという形態素を含んだyayetuytakという語は沙流地方の物語でも数例確認される。「川上氏散文説話に2例あり。静内地方の伝承者が「自分で物語る」の意だと説明した資料あり（34162）」としている（国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブC0158L00846の注より）。

⁶⁾ 「資料の概要」（AA研アイヌ語資料公開プロジェクト）。

⁷⁾ 挿入歌に類似した現象は北海道の南西部だけでなく北東部のパナンベ譚にも見られる（知里1937；北海道教育庁生涯学習部生涯学習部文化編2004所収の物語参照）。

⁸⁾ Ohnuki-Tierney（1969：3）は、ウチャシコマとトゥイタハが説話（narrative）であるとし、主題は過去の出来事であるが、神々（deities）に関わるものではないとする。なお、村崎（1989：6）はトゥイタハを「架空の物語」としている。

樺太東海岸で録音されたトゥイタハでは (NHK Vinycord 1951)、語りの切れ目ごとに聞き手がhnと相槌を入れるが、これは十勝地方のトゥイタクでも要求されることがある (中川1997: 255; 千葉大学アイヌ語研究会2021: 51, 73)。挿入歌は、本稿で訳出するトゥイタハのうち「第9話 トドを捜しに」の“Kotohno, tohno, kotonu-tonu!” 以外には、はっきり挿入歌と分かるものは見られない。「第8話 カラスとカラス貝」では、E, e!が挿入歌に当たるかもしれない。「第7話 キツネの目が傾いていて、ウサギにしっぽがないわけ」では、キツネから逃げる鳥の発する“You empty bag! Fat meat is good to eat. You thought you would get me!” 「この空っぽの袋め! 脂が乗った肉は食べ頃だ。[だから] お前は俺を食べようと思ったんだろ!」というセリフが挿入歌の英訳である可能性がある。第9話には挿入歌らしきものは見られないが、もともとは挿入歌があったのかもしれない。

4. トウイタハのテキスト訳注

アイヌ語部分はカタカナにしたが、必要だと判断した場合には原表記を添えておいた。その際、イタリック体になっているものは翻訳でもイタリック体にした。原注は [1] のように表記し、それぞれの物語の後に置いた。訳注は脚注にした。

4-1. Ainu Folk-Lore中のトゥイタハ

トゥイタハに分類される第7話から第10話の訳注を行う。

第7話 キツネの目が傾いていて、ウサギにしっぽがないわけ

クマがキツネと暮らしていた。二人はソリを作って、交代交代に引っ張って行った。最初にクマがキツネを引っ張ったが、クマは疲れてしまった。その後、キツネがクマを引っ張っていったが、木々の間の狭いところに入り込んでしまった。クマは「恐ろしいやつだな。木々が生い茂ってるところでは、そんなに早く走らないで、十分な空間があるところで走ったらいい!」と叫んだ。クマはそう言ったが、キツネは聞き入れなかった。二人はすぐにある丘にたどり着いた。頂上に向かって、二人は上った。しかし、そこでキツネがソリをひっくり返したので、クマは転がり落ちて死んでしまった⁹⁾。キツネはクマの皮を剥ぎ、家に持って帰って、その肉を食べた。食べ終わると、自分のしっぽに膀胱¹⁰⁾を結びつけた。

やがてキツネはまたお腹が空いてきたので、海辺に食べ物を探しに行った。すると、トナカイの群れが見えた。トナカイの一人が「ねえ、キツネさん! どうして君は尻尾におかしなものをつけてるの?」と尋ねた。キツネは「お二人の間に立たせてくださいな」と言った。そして、「角で私を突いてください。そうすれば、トナカイさんたちも尻尾にこ

⁹⁾ 樺太ではクマが騙され殺されるという展開の物語が見られる。「熊と知恵比べ (1) ~ (3)」(知里1955)にも川下の者(相浜と新問の伝承)がクマを騙して肉を得る。『アイヌ民譚集』(知里1937)の「パナンベ尻滑り」(幌別の伝承)においても、クマは騙され殺されるので、「川上の者の物語」のジャンルの特徴かもしれない。樺太のトゥイタハもパナンベ譚も、架空の物語だと認識されている。

¹⁰⁾ 英語原文はbladder。『研究資料』ではnínkihiを (bladders of) gall「(胆汁の) 嚢」としている (p. 212)。ここでいうbladderはそれとも異なり、アイヌ語のpiseに当たるものか。piseをおとりに使う話としては「パナンベの手足に浮袋がひつつく」(知里1937)がある。なお、piseは樺太では一般に胃のことを指す (知里1954: 37)。

んなものを付けることができるでしょう」と。そこで、二人のトナカイがキツネをふたりの間に挟んで、角で投げ上げようとした。しかし、キツネはさっと逃げ去り、トナカイはぶつかりあって死んでしまった。キツネは二頭のトナカイの皮をはいで家に持って帰り、肉を食べた。

しかし、キツネは肉を全部食べてしまうと、またお腹が空いてきたので、海辺に行って何か食べ物がないか探した。しばらくすると、ウサギが見つかった。ウサギは、「キツネ男さん、どうしてそんなものが尻尾についているの？」と言った。「私の言うとおりにしたら、お前さんもこんなものを持つことができるよ。氷に穴をあけて、そこにしっぽを入れて、前足で雪を叩けば、尻尾に何かくっついていようよ」とキツネが言った。ウサギは信じて、言われた通りにしたが、しっぽが凍ってカチカチになってしまった。キツネが飛びかかったが、ウサギは跳びあがり、しっぽを切って逃れた。

キツネはがっかりして海辺に行くと、氷の上に一羽の鳥が座っているのが見えた。キツネはその鳥にこっそり近づいたが、鳥は飛び去った。「この空っぽの袋め！ 脂が乗った肉は食べ頃だ。[だから] お前は俺を食べようと思ったんだろ！」と叫んで飛んでいった。しかし、キツネは獲物を失ったことを悲しみ、長い間、その獲物を探した。

こういうわけで、キツネの目は斜めになっている。そして、ウサギにはもともとしっぽがあったのに、キツネに騙されたせいで、いまはしっぽがないのである¹¹⁾。

第8話 カラスとカラス貝¹²⁾

昔、年老いたカラスに娘がいた。この娘のカラスが海辺に行って、浜に打ち上げられたものの中から食べるものを探していた。貝を見つけた娘は、その貝をつつき始めたが、突然、貝は殻を閉じ、小さなカラスのくちばし¹³⁾を挟んだ。海から一羽の鳥がやってきて、「もっと強く挟め！」と叫んだ。しかし、小さなカラスは、「離してよ！ カラス貝さん！」と懇願し、「エ、エ！」と呻きながら家に帰っていった。年老いたカラスが、「何をしてくちばしが折れたんだい？」と尋ねた。「海岸に出たときカラス貝を見つけて、くちばしでつつき始めた。けれど、くちばしを挟まれて、折れてしまった。お母さん、小鳥のアリスイ (*Jynx torquilla*¹⁴⁾) [1] さんと呼んで、私の治療をして！」と、娘のカラスは言った。

そこで、年老いたカラスは外に出て、「小さなアリスイ女さん、私の娘を治しにきておくれ！」と呼んだ。アリスイばあさんがやってきて、くちばしの治療をして、よくなった。アリスイばあさんは「アハトゥリ¹⁵⁾ (キンポウゲ科の食用となる草) を採りに行くときは、

¹¹⁾ 「ウサギのしっぽが短いわけ」は、一般にキツネのしっぽが短いわけとして知られているものである（「しっぽの釣り」）。この物語ではしっぽが短くなるのはキツネではなく、ウサギであるという点が特徴的である。

¹²⁾ musselをカラス貝（狭義にはイシガイ科のもの）と訳した。カラスがウバガイ（北寄貝）をつつく、あるいはつつこうとする話が北海道で知られているので（知里1936 第14話；更科源蔵・更科光1977：590）、ウバガイ（知里1936でtuturep）かもしれない。

¹³⁾ 英訳ではnoseとなっているのは、アイヌ語のetu「鼻、嘴」の訳だからと思われる。beakと訳されている部分とともに「くちばし」と訳した。

¹⁴⁾ 原文は*Jynx torquilla*とあるが、正しいと思われる*Jynx torquilla*に修正した。アイヌ語で何というのかは不明である（知里1962にもアリスイの項目はない）。「ヤチブキの話」（村崎編訳2001：110-113）では、acahcipo（おばあさん [お祖母さんではない]）がこの役を担当している。このacahcipoという不思議な存在に関しては丹菊（2012：72）参照。

一度にたくさん採らないように！」と言って、去っていった。

しかし、しばらくすると、娘カラスはくちばしに草を入れすぎてしまった。アリスイばあさんが呼ばれたが、「アハトゥリをたくさん取ってはいけないと言ったのに、言いつけを守らず、あまりに多くの枯れ草を取ってしまった。もうあなたを助けられない」と言った。この娘カラスはくちばしが腐って、死んでしまった¹⁶⁾。

[1] この鳥は、寓話fable [注一トウイタハのこと] の中で医者として考えられている。

第9話 トドを捜しに¹⁷⁾

兄は私と一緒に住んでいた。私は会ったことのないトドに会いたくてたまらなかった。トドに憧れて、歌をうたった。名前しか知らないのに、私はトドを深く愛した。私は兄に(トドのところに連れて行ってくれるよう)頼み続けたが、兄は私の頼みに嫌気がさして、舟を作り始めた。斧を持って「コトホノ、トホノ、コトヌ・トヌ！」と木を打った。舟が完成すると、家の中に入ってきて、「さあ早く、旅の準備をしなさい。私と一緒に、お前がまだ会ったことがなくて、会いたがっているトドのところに行こう」と言った。そして、私は耳の下の穴に耳輪をふたつ、耳の上の穴に耳輪をふたつ付けた¹⁸⁾。髪を整えて、兄と一緒に出かけた。

舟に乗り込み、遠くから見える小さな島に連れて行ってもらった。トドの住処に着いたと思った。私たちは水面から突き出た岩を叩いた。海岸近くの丘は今は隠れてしまい、さらに内陸にある山も見えなくなった。岩礁のすぐ近くまで行き、人が通った形跡がないかと周りを見回したが、私たちの周りに人がいた形跡はひとつもなかった。私たちは家に入ると、年老いたトドがいるのに気付いた。古い傷口には膿みがあり、新しい傷口にはかさぶたがあった。兄は私を家に入らせ、私を置き去りにして帰っていった。私はそのまま残り、ここでとても惨めな暮らしを送った。

¹⁵⁾ ahturiはエゾノリュウキンカ(ヤチブキ)の根(白浦、真岡)で、秋に採集して煮て食べたり、乾かしたりして煮て食べる(白浦)(知里1953b:149)。カラスはこの干してあるものを取っているらしい。「ヤチブキの話」(村崎編訳2001:110-113)では、おばあさん(acahcipo)が干していたヤチブキを取ったために、カラスはくちばしを折られている。これはカラスがヤチブキを食べない由来譚となっている。なお、この話でのカラスはetuhkaで、ハシプトガラスである。北海道教育庁生涯学習部文化課編(2003:117-121)では、etuhka「ハシプトガラス」、kampro(h)「ワタリガラス」が登場する。話の筋はかなり違うが、ハシプトガラスはやはりatturi eiska「ヤチブキを盗む」シタリ(同121)ノアットゥリ エエシカ(浦田編1998:251)するとある。

¹⁶⁾ カラスのくちばしが腐るという展開は、樺太アイヌの物語にしばしば見られる(北海道教育庁生涯学習部文化課編2003:120(117-121);村崎編訳2001:118(114-119))。また、ホッキ貝にくちばしを挟まれるという筋の幌別の物語が知里(1936)に掲載されているが、それはカラスのくちばしが丸くなったことの由来譚となっている。カラスはホッキ貝を食べようとしたため、ホッキ貝にくちばしを挟まれて折られてしまう。そして、折れたくちばしを砥石で研いだため丸くなったのだという。

¹⁷⁾ 英題はIn quest of Sea-lion。本話のsea-lionはetaspeであると推測し、トド(キタアシカ)とした。Aino Folk-Tales (Chamberlain 1888) 第30話にもPanaumbe, Penaumbe, and the Sea-Lion。(幌別)があるが、sea-lionに相当するものは、etaspe「トド」と考えられる。別の物語の翻訳時に、大野徹人氏からトドもアシカの一種で、sea lionをアシカと訳すのも間違いではないことや、ニホンアシカは北海道にもいたそうだと指摘を頂いた。

¹⁸⁾ ninkariのこと。「かつてのアイヌ女性は、特に他家を訪問するときには、一度にいくつかの耳輪をつけるのを好んでいた」(『研究資料』130)という。ninkari/ninkaariの使用に関しては、Ohnuki-Tierney(1969:128)や北海道ウタリ協会アイヌ語勉強会訳(1985:155)参照。

第10話 女性と悪魔

私はたった一人で暮らしている女性だった。ある時、誰かが家に近づいてくる足音が聞こえた。誰だろうと思って外に出て、見てみると、美しい男性の姿をした強大な悪魔であった。私は家に帰り、床に蓐を敷くと、男性が入ってきた。食事を出してあげると、「あなたはあまりにも美しい女性なので、貴重なものを婚資¹⁹⁾として出さないと結婚できないのです。だから私は国に帰って宝石を取ってくることになっている」と言った。その男性はそう言って、部屋と通路を埋め尽くすほどの木を切って、姿を消してしまった。別れ際に「木材は無駄遣いしないでお使いなさい」と言った。

ある日、小屋の近くで男の足音が聞こえ、すぐに見知らぬ人が入ってくるのが見えた。髪はボサボサだった。男は家の中にある木材を燃やし始め、木材の山が燃え尽きるまで燃やした。そして、一緒に森に行くよう求めたが、私は断った。男は私を背負おうとした。私の鼻から垂れた氷柱を取って戸に突き刺し、私のこめかみから生えた毛を切り取って戸の片側に吊るした。そして、力づくで私を背中に乗せて森に運んでいき、一軒の家にとどり着いた。

男と一緒に暮らしている間に、家に来た男性が泣いているのを一度耳にした。一緒に住んでいた男は、それを聞くや否や、私を隅に隠してしまった。もう一人の男 [=泣いていた男] が外から入ってきた。見るとすぐに、かつて私と結婚することを約束し、私のために大切なものを取りに行った人だと分かった。「ここに住んでいる間に、女性を見ませんでしたか？」とその男性が尋ねた。「ここに暮らしているが、女性は見ることがない」と私の同居人は答えた。すると強大な悪魔 [=同居人] は、「この小屋から出て、島の下端に霧²⁰⁾がかかり、上端にも霧がかかり²¹⁾、真ん中にも霧がかかるようになったら、俺が死んだことがわかるだろう」と言った。そう言って、同居人は去っていった。

私も小屋から出て、島の下端と上端と真ん中に霧がかかっているのを見て、男が死んでしまったに違いないと思って見に行った。すると、私は頭を宝石箱の上に横たえて死んでいる男に躓いた。私はその男に頭を寄せて涙を流した。しかし、反対側から、神のように美しい男が現れた。「どうして強大な悪魔を哀れむのですか？」とその男性は尋ねた。「やつの顔は美しいが、その魂は暗黒だ」と言って、私を連れて行ってくれた。それ以来、私は非常によい暮らしを送った。

謝辞

本稿は科学研究費補助金特別研究員奨励費（課題番号20J11234）による成果の一部である。2019年度に東京大学で山田慎太郎氏と検討を行い、2021年度に訳注の加筆と解説部分

¹⁹⁾ 原文はrewardだが、結婚に必要なものということで婚資とした。

²⁰⁾ 登場人物が斬られて降るkem-ahto「血の雨」の事だろうか。Pilsudski (1912a) 第6話（『研究資料』第16話）には、kem-ahtoに当たるものがbloody rain（『研究資料』第16話では単にshowerやrain）とあるので、ここでfog「霧」とされているものとは違うかもしれない。なお、オヤシ（化物）の登場を象徴するとされるkem-uurara（血の霧）（Ohnuki-Tierney 1969: 72）のことを示す可能性もある。いずれにせよ、この霧が生じているということは同居人が斬られて（?）、最終的に倒されることと直接の関係があると思われる。

²¹⁾ 便宜上、beginningは「上端」、endは「下端」と訳した。ピウスツキによれば、「通常、土地の北側や東側は『頭（the head）』または始まり（beginning）、南側や西側は『足（foot）』または終わり（end）とみなされる」（Pilsudski 1912a: 77）。

の執筆を行った。その後、中川裕先生からコメントをいただき、若干の修正を行うことができた。ここに記して感謝申し上げる。ただし、本稿の不備は筆者に帰するものである。

参考文献

- Ohnuki-Tierney, Emiko (1969) *Sakhalin Ainu Folklore*. American Anthropological Association, Washington, D.C.
- Pilsudski, Bronislaw (1912a) Ainu folk-lore. *The Journal of American Folklore* 25(95):72-86.
- Pilsudski, Bronislaw (1912b) *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*. Cracow.
- Pilsudski, Bronislaw (1998) *The Collected Works of Bronislaw Pilsudski Vol. 3: Ainu Language and Folklore Materials 2* /ed. by Alfred F. Majewicz, Mouton de Gruyter, Berlin; New York.
- Pilsudskij Bronislav (2002) *Fol' klor Sakhalinskikh Ajnov*. Juzhno-Sakhalinsk. [http://panda.bg.univ.gda.pl/ICRAP/en/Folklor_sachalinskich_Ainov.html]
- アイヌ民族博物館編 (2001) 『虎尾ハルの伝承 鳥 (アイヌ民族博物館伝承記録5)』 白老町: アイヌ民族博物館.
- 浦田遊編 (1998) 『アイヌ・モシリー幻のアイヌ語誌復刊』 釧路: 釧路アイヌ文化懇話会.
- 奥田統己 (1998) 「織田ステノのイコペナカ」 『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 4: 101-126.
- 北原次郎太 (2013) 「樺太アイヌ語の世界」 『ニューエクスプレス 日本語の隣人たち』 8-27. 東京: 白水社.
- 北原次郎太・田村すず子・田村雅史・田村将人・丹菊逸治編 (2003) 『アイヌ語樺太・名寄・釧路方言の資料—田村すず子採録 藤山ハルさん・山田ハヨさん・北風磯吉さん・徹辺重次郎さんの口頭文芸・語彙・民族誌 (環太平洋の「消滅に瀕した言語」 成果報告書A2-039)』 吹田: 大阪学院大学情報学部.
- 金田一京助 (1911) 「樺太アイヌの音韻組織 (三)」 『人類学雑誌』 27 (8): 472-479.
- 金田一京助・知里真志保編 (1948) 『りくんべつの翁 アイヌの昔話 (世界昔ばなし文庫)』 東京: 彰考書院.
- 阪口 諒 (2019) 「樺太アイヌのオイナ: B. ピウスツキと C. エッターによる英訳テキスト」 『北海道民族学』 15: 35-44.
- 阪口 諒 (2020) 「ピウスツキ採集のアイヌ語樺太方言民話テキスト—「カレイ男とカジカ男」」 『千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書』 354: 43-69.
- 佐藤知己 (2000) 「トウイタケ」 『日本民俗大辞典』 下: 176. 東京: 吉川弘文館.
- 『四宅ヤエの伝承』 刊行会編 (2012) 『富水慶一採録 四宅ヤエの伝承 韻文編1』 釧路: 『四宅ヤエの伝承』 刊行会.
- 更科源蔵 (1963) 『アイヌ民話集』 札幌: 北書房.
- 更科源蔵・更科 光 (1977) 『コタン生物記』 Ⅲ. 東京: 法政大学出版局.
- 杉村キナラブック、大塚一美、三好文夫、杉村京子 (1969) 『キナラブック・ユーカラ集 (旭川叢書第3巻)』 旭川市.
- 高橋靖以 (2014) 「アイヌ」 山田仁史・永山ゆかり・藤原潤子編 『水・雪・氷のフォークローア—北の人々の伝承世界』 5-25. 東京: 勉誠出版.
- 田村すず子編 (1984) 『アイヌ語音声資料』 1. 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
- 丹菊逸治 (2001a) 「サハリンアイヌ散文説話の—ジャンルtuytahについて—「挿入歌」からみた文字資料—」 村崎恭子編 『少数民族言語資料の記録と保存—樺太アイヌ語とニヴフ語— (ELPR A2-009)』 69-90. 吹田: 大阪学院大学情報学部.
- 丹菊逸治 (2001b) 「サハリンアイヌの散文説話tuytahについて」 『口承文芸研究』 24: 37-48.
- 丹菊逸治 (2012) 「サハリン島アイヌ民族の「三人きょうだい譚」の成立仮説—ニヴフ民族の「三人の獵師」からの影響—」 『口承文芸研究』 35: 67-76.
- 千葉大学アイヌ語研究会編 『沼田武男「採訪帖」—アイヌ語十勝方言テキスト集』 千葉: 千葉大学文学部ユーラシア言語文化論講座.
- 知里真志保 (1936) 『アイヌ民俗研究資料第一 (アチックミュージアム彙報 第8)』 東京: アチック・ミュージアム.
- 知里真志保 (1937) 『アイヌ民譚集』 東京: 郷土研究社. (再刊: 知里真志保編訳 (1981) 『アイヌ民譚集 (岩波文庫, 赤 (32)-081-1)』 東京: 岩波書店)
- 知里真志保 (1944) 「樺太アイヌの説話」 『樺太庁博物館彙報』 3 (1): 1-146. (再録: (1973) 『知里真志保著作集』 1: 251-372. 東京: 平凡社.)
- 知里真志保 (1948) 「樺太アイヌの説話」 『民族学研究』 12 (4): 328-338.

- 知里真志保 (1953a) 「樺太アイヌの神謡」『北方文化研究報告』8:185-240.
- 知里真志保 (1953b) 『分類アイヌ語辞典』植物篇. 東京: 日本常民文化研究所.
- 知里真志保 (1954) 『分類アイヌ語辞典』人間篇. 東京: 日本常民文化研究所.
- 知里真志保 (1955) 「アイヌの散文物語—川下の者の昔話」『北方文化研究報告』10:251-319. (再録: (1973) 『知里真志保著作集』3:137-192. 東京: 平凡社.)
- 知里真志保 (1962) 『分類アイヌ語辞典』動物篇. 東京: 日本常民文化研究所.
- 中川 裕 (1996) 「アイヌ物語文学ジャンル名の分布と歴史」言語学林1995-1996編集委員会 (編) 『言語学林1995-1996』:151-163. 東京: 三省堂.
- 中川 裕 (1997) 『アイヌの物語世界 (平凡社ライブラリー190)』東京: 平凡社.
- ピウスツキ, プロニスワフ (2000) 「B. ピウスツキのサハリン紀行」(荻原眞子訳) 『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』6:219-240.
- 萩中美枝 (1987) 「アイヌの口承文芸オイナ」『国立民族学博物館研究報告』別冊5:389-403.
- 服部四郎編 (1964) 『アイヌ語方言辞典』東京: 岩波書店.
- 北海道ウタリ協会アイヌ語勉強会訳 (1985) 「B・ピウスツキ／樺太アイヌの言語と民話についての研究資料〈8〉」『創造の世界』53:124-156.
- 北海道教育庁生涯学習部生涯学習部文化編 (2003) 『平成14年度 知里真志保フィールドノート (2)』札幌: 北海道教育委員会.
- 北海道教育庁生涯学習部生涯学習部文化編 (2004) 『平成15年度 知里真志保フィールドノート (3)』札幌: 北海道教育委員会.
- 村崎恭子 (1989) 『樺太アイヌ語口承資料1 (昭和63年度科学研究費補助金 (一般研究 (C)) 研究成果報告書「樺太アイヌ語の記述的研究」(課題番号 62510266))』[札幌: 北海道大学言語文化部]
- 村崎恭子 (2001) 「B. ピウスツキ収録の昔話11編と民話1編—再転写によるアイヌ語テキストと日本語訳—」村崎恭子編『少数民族言語資料の記録と保存 樺太アイヌ語とニヴフ語 (「環太平洋の言語」成果報告書A2-009)』:91-135. 吹田: 大阪学院大学.
- 村崎恭子編訳 (2001) 『浅井タケ口述 樺太アイヌの昔話』東京: 草風館 (次のサイトでアイヌ語テキスト、日本語訳とともに音声が開示されている。[http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/kiki_gen/murasaki/asai01.html])
- NHK Vinycord (1951) 「樺太アイヌ昔話 トウイタツ」(レコード番号: VC-26). (国立国会図書館歴史的音源で視聴)

ウェブサイト

- AA研アイヌ語資料公開プロジェクト
<https://ainugo.aa-ken.jp/> (2021/06/06最終閲覧)
- 国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ
<https://ainugo.ainu-museum.or.jp/> (2021/06/06最終閲覧)